

2. どういうときに熱中症を疑うか

図2-3は2016年夏の例です。梅雨の合間に急激に暑くなった時期(7月上旬)や、7月下旬の梅雨明け直後から8月いっぱいの盛夏にかけて多くの熱中症患者が医療機関を受診し、特に入院や死亡の重症例が多く発生しました。

環境因子

- ・ 気温が高い、湿度が高い
- ・ 風が弱い、日差しが強い
- ・ 照り返しが強い、ふくしゃ放射熱^{*1}が強い
- ・ 急に暑くなった

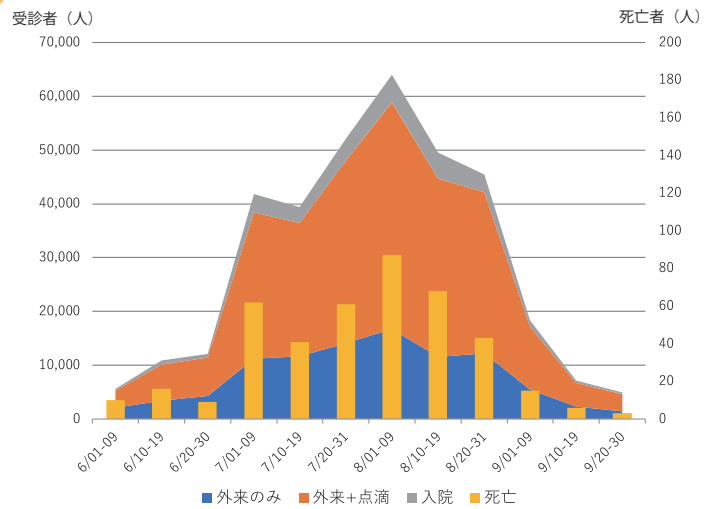


図2-3 2016年夏の10日毎の受診者数 (診療報酬明細書による)

(提供: 帝京大学 三宅康史氏)

熱中症の危険信号として、下のような症状が生じている場合には積極的に重症の熱中症を疑うべきでしょう。

熱中症の危険信号

- ・ 高い体温
- ・ 赤い・熱い・乾いた皮膚 (全く汗をかかない、触るととても熱い)
- ・ ズキンズキンとする頭痛
- ・ めまい、吐き気
- ・ 意識の障害 (応答が異常である、呼びかけに反応がない等)

日本救急医学会による2020年夏に熱中症で入院した症例(1032例)からの検討(Heatstroke STUDY2020: HsS2020) ^{*2}によれば、発生状況別にみた場合、図2-4左図のとおり、肉体労働、スポーツ中の熱中症は、主に屋外で生じているのに対し、日常生活においては屋内での発症が屋外の2倍以上となっています。日常生活・屋内における発症は450例近くに達し、全数の4割以上を占めています。また右図のとおり、どの状況においても男性が女性を上回る結果となっており、とくに肉体労働では差が顕著となっています。

年齢との関係のみみると、発生状況別では図2-5のとおり、肉体労働では各年代とも発症がみられ、40～60代のほか80代でもかなり多くなっています。スポーツはそのほとんどが10代での発症です。一方、日常生活では、概ね年齢が上がるにつれ増加し80代がピークとなっているほか、50～90代を中心に幅広く発症しています。男女別では図2-6のとおり、10代やそれ以下では男女差はあまり大きくありませんが、20～60代では圧倒的に男性が多く発症しています。70代以上では女性の発症も多くなり90代では女性のほうが多くなります。

^{*1} 熱せられたアスファルト道路やコンクリートの壁等からの放射によって伝わる熱。

^{*2} 日本救急医学会【熱中症に関する委員会】が、2006年より隔年の夏期に全国の救急医療機関に搬送された熱中症症例を収集し、日本における熱中症の実態、特徴、重症度、合併症、後遺症等を調査し、適切な診断と治療、予防の確立に資する研究目的に実施しており、他のデータに比べ重症熱中症の構成率が高い特徴がある。

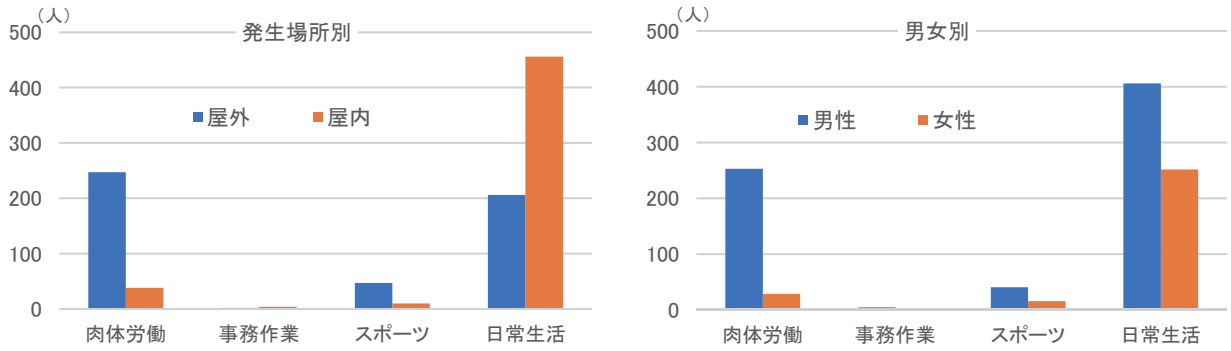


図2-4 発生状況別 熱中症入院例 (発生場所別(左)、男女別(右)) (2020年)

出典: 日本救急医学会

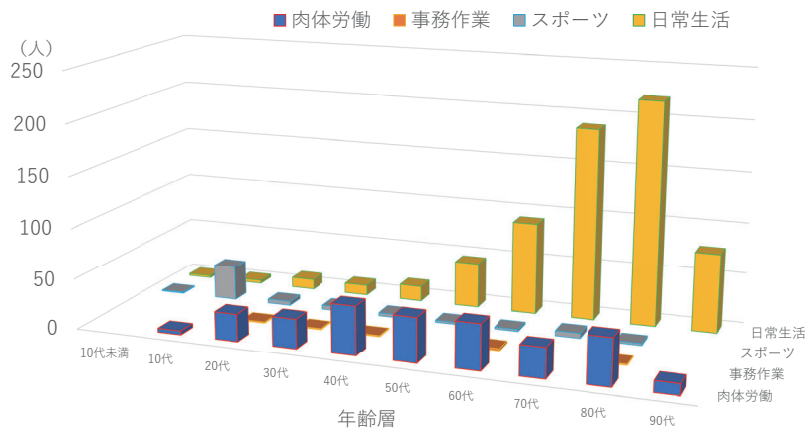


図2-5 年齢別・発生状況別 熱中症入院例 (2020年) 出典: 日本救急医学会

これらを総合すると、10代のスポーツでは男女ともに発症し、壮年期の肉体労働者は男性が圧倒的に多いことがわかります。女性は50代以降年齢とともに発症が増加し、70~80代で非常に多くなります。高齢者は日常生活で、男女ともに発症していると考えられます。

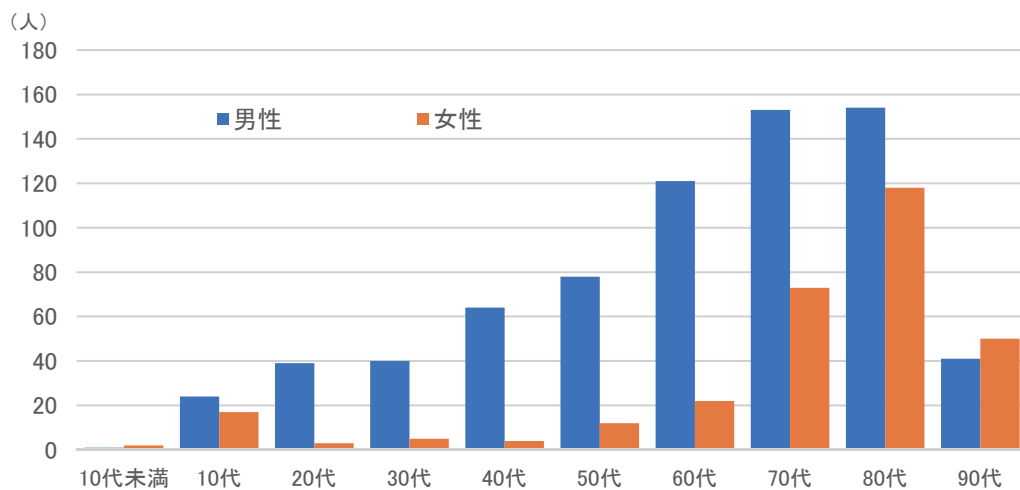


図2-6 年齢別・男女別 熱中症入院例 (2020年) 出典: 日本救急医学会